

“A Painful Case”における「影」と「アニマ」

岡野浩史*

‘Shadow’ and ‘Anima’ in “A Painful Case”

Koshi Okano*

Received October 5, 1993

James Joyce の短篇集 *Dubliners* 中の一編“A Painful Case”は不思議な魅力をたたえた作品である。話の展開そのものは単純極まりない。中年の独身の男が既婚の女性と親密になるが、結局身をひく。そして数年後、男は新聞の記事で、その女性が踏切事故で死んだことを知る。それだけの話である。異常な事件が起こるわけでもない。ジョイスの語りも、事の推移を時間的順序に従って淡々と語るだけである。しかしながら、表面上の単純さとはうらはらに、この短篇には、何かしら *Dubliners* の中の他の短篇とはちがった独特のものがある。それは読む者の心の奥深いところに触れてくる。魂にじかに触れてくるものがある。

“A Painful Case”は主人公 Duffy に現実起きた出来事として書かれている。実際、我々がこの作品を読むとき、そのままごく普通のリアリズム小説として読むことができる。しかし、この作品をリアリズムのレベルから解き放って、ダフィーの「内界」を描いたものとして読み直してみると、この短篇の与える感銘の意味がよりよく理解できるように思われる。以下、本論では“A Painful Case”を Carl Gustav Jung の心理学の概念を拠り所として検討してみる。

最初に、ユングの心理学におけるいくつかの鍵概念をごく簡単に説明しておく。ユングは人間の心 (personality と呼ばれることがある) を以下の四つに分けて考える。

(1) 自我 (ego あるいは persona)

我々が普通に意識している自分。意識でとらえている我々の部分。ペルソナということもある。

(2) 影 (shadow)

自我によって意識されているかもしれないが、抑圧されている、自我の肯定的あるいは否定的な部分。これは夢の中では同性の姿となって現われることが多い。

(3) アニマ (anima)

男性の内なる女性。男性の内部にある女性性。女性の内部の男性性はアニムス (animus) と呼ばれる。

* 英米語学科

Department of English

(4) 自己 (self)

個人がなりうる総合的な全体性。自我や影がアニマと統合されたときに完成される。意識の部分と無意識の部分とを含んだ心の全体性の中心¹。

以上のことを念頭におきつつ“A Painful Case”を検討していきたい。

主人公ダフィーは、銀行の出納係である。年齢は特定されていないが、交際相手となる Mrs Sinico に初めて会ったとき、自分より1, 2才若いだろうと推測をしているから、物語の開始の時点では、40才前後である。ジョイスは、ダフィーを描写していく際に、その住んでいる環境を説明しつつ、停滞、行き詰まりなどを連想させるような布置をする。彼の住んでいる家は“old”で“sombre”であり、その家からは“disused distillery”が見える。ダフィーの部屋には、彼が思いついたことを書き留めた紙きれの束が置かれているが、書かれたものがまとまった総体へと展開させられることはない。成長、発展がないのだ。

ダフィーの部屋の書架では、Wordsworth が一番下に置かれ、公教要理が一番上の棚に置かれている。ロマンチズムの精華であるワーズワース。そして、カトリズムの教義の象徴ともいえる公教要理。このふたつを上下の位置関係において対比させていることは決して偶然ではないだろう。ジョイスのカトリズムに対する態度は、*A Portrait of the Artist as a Young Man* の中に、詳細に描かれている。ジェズイット派の学校の優等生として、ジョイスの分身Stephen は、一時は、キリスト教に身も心も捧げようと決心する。校長からも聖職につくように奨められる。カトリズムはスティーブンの体の奥深くまで入り込んではいるが、彼は心の底からは納得がいかない。ある日、浜辺に遊ぶ少女の姿を見かけたときに、スティーブンは、一種の回心—ジョイスのことばで言えば epephany—を経験する。つまり、自分の道は宗教ではなく芸術であると悟る。この場面で、少女が鳥のイメージで描かれていることは重要である。鳥はしばしば我々の魂の象徴だからだ。ジョイスにとってカトリズムとは魂を抑圧するものである。ジョイスの青春とは、自分の体の中に入り込んでしまったカトリズムとの凄惨な戦いの記録である。カトリズムからどうやって己れの魂を救いだしていったかの記録が *A Portrait of the Artist as a Young Man* である。ジョイスは、魂は宗教から救いだされねばならぬと考えており、その態度は終生変わらなかった。*Dubliners* の執筆当時も同様の考えを持っていた。ワーズワースと公教要理との位置関係は、ダフィーの魂の状態を象徴的に表していると言えよう。

しかし、公教要理が、棚において優位を占めているから、ダフィーが宗教に救われているかというところではない。その公教要理は、手帳の布表紙に綴じ込んだ粗末なものであり、彼は教会には行かないし、宗教に関わりを持つのは親類の葬式のときだけである。彼にとって、キリスト教は生きる力とはなっていないし、さりとて、その代わりになるものが見つからないわけでもない。そのことは端的には先程見た彼の環境に暗示されている。現在のダフィーはユングが自己実現 (self-realization) あるいは個性化 (individuation) と呼んだものを達成できていない状態にある。我々の自己は絶えずパーソナリティーを全きものにしようとして、内在的に我々の内部にあるすべての可能性の実現を志向する。そして、自己実現を成し遂げるために、もっとも重要なものは影であり、アニマである。

影とは実現されていない自己である。人格の否定的な影の部分を取り出して人格化し、小説作品として仕立て上げたもっとも有名な例は Robert L. Stevenson の *Dr. Jekyll and Mr.*

Hydeであろう。この作品でのハイド氏は、通常は表の人格（persona）に文字どおり“hide”している状態だが、薬の力を借りて表面に出てくると悪意に満ちた暴力行為を行い、最後にはジキル博士を破滅させてしまう。ジキル博士は、心理学的にみれば、影を自我に統合できず、自己実現に失敗した典型である。これは影の統合がいかに困難であるかを如実に物語っている。E. A. Poeの *William Wilson* も影を扱った先駆的な作品である。Poeはしばしば近代文学の創始者とみなされるが、近代から、我々人間が、精神的にきわめて困難な時代へと足を踏み入れたことを、彼は見事に見抜いていたということだろう。ダフィーは我々の時代の、ダブリンにおけるWilsonの末裔である。

アニマの持つ重要な役割をフォン・フランツは次のように述べている。

アニマが演ずる大切な役割は、男性の心を真の内的価値へと調和せしめ、深遠な内的な深みへと導いてゆくことである。それはあたかも、内的な「ラジオ」がある種の波長のみと同調し、無関係なものを排除して「偉大なる人」（無意識界の自己）の声のみを聞けるようにするかのようである。この内的な「ラジオ」の受信を確立する上において、アニマは、内界および自己へのガイドとなり、仲介者となる²。

文学作品におけるアニマのもっとも代表的な例は、DanteにおけるBeatriceである。人生の半ばにおいて道に迷ったダンテは、最初はVergilに導かれていくが途中からはベアトリーチェに導かれて天国に着く。これはダンテの内界の物語として見れば、ダンテはベアトリーチェというアニマを自我に統合することによって、自己実現に成功したということになる。しかし、そこに至るまでの困難さは、『神曲』に示される通りである。

今、ダンテが「人生の半ばにおいて道に迷った」と『神曲』の冒頭に書いているとおりの言い方をしたが、ユングに言わせると人生は前半よりも後半こそがむずかしい。40才前後の男性には抑鬱症状がかなりの頻度で見られるが、それは、そのときまで社会的な目標を達成するために、パーソナリティーの総体性を犠牲にした結果である³。河合隼雄は、ユングの考えを次のようにパラフレーズしている。

ユングは人生の後半の重要性を強調する。むしろ、人生の前半はその人にふさわしいペルソナを形成するため、社会的地位や財産などをつくるために、エネルギーが消費される。しかし、人生の後半は、むしろ内面への旅が要請される。言うなれば、生きるだけでなく、死ぬことも含めた人生の全体的な意味をみいださねばならない。このような「時」が訪れた時、多くの人は中年の危機を迎える⁴。

ダフィーも今そういう「時」を迎え、影と対峙し、アニマを統合することを迫られているのである。影はふつう男性の場合は男性の姿となって、女性の場合は女性の姿となって現われる。「A Painful Case」においても例外ではなく、ダフィーの影はMr Sinicoである。

シニコ氏は、ダブリンとオランダを結ぶ商船の船長であり、家をあけることが多い。シニコ夫人との関係について、ジョイスは次のように言う。“He had dismissed his wife so sincerely from his gallery of pleasures that he did not suspect that anyone else would take an interest in her.”⁵ここでジョイスは“gallery of pleasures”といういささか耳慣れないことばを使っているが、John JacksonとBernard McGinleyは、引用した文の前半部について、ここはシニコ夫妻の結婚生活が“mariage blanc”であることの“Joyce’s elegant euphemism”として⁶。たしかにそうかもしれない。しかし、ここで重要なのはそのことよりも、ジョイスがここで意図的に“gallery of pleasures”という言い方をすることによって、シニコ氏が“a man of pleasure”であることが強く暗示されるということだろう。聖職者にも似た禁欲的な生活を送っているダフィーとは正反対の生活をシニコ氏は送っているのだ。つまり、シニコ氏はダフィーの影である。彼は妻であるシニコ夫人が、ダフィーと交際することに積極的な態度を取る。それはシニコ氏が、ダフィーの目的は娘のほうだろうと考えていたという表面上の理由からだけではない。シニコ氏はダフィーの影であるからこそ、「自己」を救うために、その事に積極的なのである。

ダフィーは、アニマとなるシニコ夫人に初めて会ったとき、その顔が“intelligent”であり、目が“great sensibility”を表していると、どちらかといえば、知的な面にかたよった観察をしている。しかし最後のところでジョイスは、ダフィーが彼女の胸の豊かさにつよく印象づけられて、それが“defiance”のように感じられたということをおぼろげに書き加えている。ここではもちろん表面上の意味は、ダフィーが禁欲的な生活を送っているから、肉体的に女性を求めているということだろうが、ユング的な立場に立てば、ダフィーの自己が無意識のうちにアニマを求めてそれを自我に統合せしめ、自己、そしてパーソナリティーを全きものにしようとしていることになる。

ダフィーはシニコ夫人との交際を始めると、それまで感じたことがなかったような安らぎを覚える。

Her companionship was like a warm soil about an exotic... This union exalted him, wore away the rough edges of his character, emotionalized his mental life⁷.

ここに我々は、アニマの持つ女性性により、自我へのアニマの統合が始まり、魂（自己）が癒され、ダフィーがより充実した存在へと変化しつつあるのを見ることが出来る。しかしこの状態も長く続かない。ダフィーはシニコ夫人が次第に彼にのめりこんでいくのに気が付くと、逡巡した末に身をひいて、影であるシニコ氏との対決を避けてしまう。その結果、彼は影を自我に統合することもできなければ、影が送りこんできたアニマも彼は自我に統合することができないでしまう。その原因の一つはダフィー自身のことばによるならば、我々の魂は“incurable loneliness”の状態にあり、“We cannot give ourselves:we are our own” (p.124) だからである。しかし、これは *Dubliners* 全体の中で考えるなら、ダフィーもまたダブリンの“paralysis”にとらわれていたということだろう⁸。*Dubliners* 中のもうひとつの短篇“Eveline”において、恋人 Frank とダブリンを脱出しようとしていた Eveline が、船を目の前にして、一步も動

けなくなってしまうのと同様である。ジョイスが考えるように“paralysis”の中心としてダブリンはそこに住む人々を呪縛しているのだ。だから、ダフィーは影と対決してアニマを自分の男性性に統合するだけの強固な自我を発達させることができない。自己はアニマを求め、統合を望むができないのである。

シニコ夫人と別れた後のダフィーは夫人に出会う以前よりいっそう孤独となる。考えたことや思いついたことを書いておくこともほとんどなくなる。本棚には新たに Nietzsche の本が2冊置かれている。*Thus Spake Zarathustra* と *The Gay Science* である。両者とも反キリスト教的なニーチェの代表作である。*The Gay Science* においてニーチェは「神の死」ということばを初めて使い、それをさらに敷衍し徹底した超人思想を展開したものが *Thus Spake Zarathustra* だが、ここでは「神の死」より、ニーチェの超人思想の面をジョイスは意識しているにちがいない。ニーチェの思想は強者の思想である。影のあってはならない世界である。その世界にあっては、男女の結びつきは超人が超人を生み出すためのものに過ぎず、徹底した男性性優位である。ツアラトゥストラを生み出したニーチェが晩年の10年間をほとんど廃人としてすごしたことは決して偶然ではないだろう。彼は、影を自我に統合し、男性性を女性性と統合させ、より高い内的存在へと自らを止揚させることができなかったのだ。そしてダフィーもまた、現在の状態を続けるなら、ニーチェと同じような運命をたどることになるだろう。

シニコ夫人の死はダフィーに決定的な打撃を与えることとなる。彼女の死を報じる新聞を読み返すとき、彼は、司祭がミサの序誦の前にある「密誦」を読むように、口は動かすが声は出さずに読む。ダフィーにはシニコ夫人の魂のために祈らねばならないだけの理由がある。彼が夫人の思いにやれば、彼女は死なずにすんだかもしれないのだ。彼はそのことに気づいている。記事は事故の様子を、機関士や目撃者の話を引用して、詳細に伝えている。そしてシニコ夫人の生活にも触れている。読みながらダフィーは夫人の手の感触を思い出す。そして悟るのである、彼は夫人を救うことができなかったばかりでなく、自分自身も救うことができなかったということ。ダフィーがミサの密誦を読むように記事を読むのは、シニコ夫人のためだけではない。彼はおのれの魂のために読んでいるのである。

ジョイスは最初この作品を“A Painful Incident”と名づけていた⁹。あとで“A Painful Case”という現在のタイトルにした。この“incident”から“case”への変更は作品に決定的な影響を及ぼしている。“A Painful Incident”では、その意味するところが、単にシニコ夫人の痛ましい事故というだけである。新聞記事の見出し以上の役割は果たしていない。しかし、“A Painful Case”とすると、シニコ夫人の事故だけでなく、その人生の痛ましさをも意味し、さらには、ダフィーの人生の痛ましさをも意味することができる。ジョイスは、シニコ夫人の痛ましい生と死を語りながら、ダフィーの痛ましい生を語っている。“A Painful Case”と全体のタイトルを名づけることで、ダフィーの悲劇的な生が浮かび上がってくる。そしてさらに“case”ということばには「症例」という意味がある。ジョイスはダフィーの症例を語りつつ、我々現代人一般の症例を語っているのだ。“A Painful Case”ということばはシニコ夫人にあてはまり、ダフィーにあてはまり、そして我々にあてはまる。ジョイスはこのことばを作品のタイトルにすることにより、重層的な構造を作品に与え、より深みのあるものに仕立て上げることができたのである。

ユングはゲーテの詩を引用して言う。

The Highest bliss on earth shall be

The joys of personality!

This gives expression to the view that ultimate aim and strongest desire of all mankind is to develop that fulness of life which is called personality¹⁰.

ここで“personality”と呼ばれているものは、我々がこれまで「自己」あるいは「魂」と呼んでみたものと置き換えることが可能だろう。我々の内部にあり、意識界と無意識界とにまたがって存在する「自己」は、我々の持つすべての可能性の実現を志向する。それはすべての人間にとってもっとも本質的なものであり、もっとも真摯な願望である。そのためには我々の内部で影が自我に統合され、男性性と女性性とが統合されなければならない。しかし、その統合は容易なものではない。ダフィーのアニマであるジニコ夫人が男性性の象徴ともいえる機関車に轢き殺されるというのはそのことを雄弁に物語っている。我々はダフィーの悲劇を目のあたりにしながら、おそらくは無意識のうちに、自らの内部に、統合を求めて果たされぬ「自己」の苦悩を感じとっているにちがいない。“A Painful Case”は、読者の意識下のものに働きかけ、魂を揺さぶるのである。

註

- 1) Michael Atkinson: “Robert Bly’s *Sleeping Hands*” in *Jungian Literary Criticism*, edited by Richard P. Sugg (Illinois: Northwestern University Press, 1992), p. 85.
- 2) M.-L.フォン・フランツ: 「個性化の過程」(『人間と象徴』(下巻), 河出書房新社, 1975年), p. 41.
- 3) C. G. ユング「人生の転換期」(『現代思想』, 第7巻第5号, 青土社, 1979年), p. 48.
- 4) 河合隼雄『無意識の構造』(中央公論社, 1977年), p. 181.
- 5) James Joyce, *Dubliners* (London: Jonathan Cape, 1967), p. 122.
- 6) John Wyse Jackson & Bernard McGinley, *James Joyce’s Dubliners: An Annotated Edition* (London: Sinclair-Stevenson, 1993), p. 97.
- 7) Joyce, *Dubliners*, p. 123.
- 8) *Selected Letters of James Joyce*, edited by Richard Ellmann (London: Faber and Faber, 1975), p. 83.
- 9) Jackson & McGinley, *James Joyce’s Dubliners: An Annotated Edition*, p. 100.
- 10) C. G. Jung. *The Development of Personality*, (New York: Princeton University Press, 1954), p. 167.